

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730657

研究課題名(和文) 幼児期から学童期の文字獲得に関する縦断的研究 文字機能の自覚と使用実態に着目して

研究課題名(英文) From Knowledge of Hiragana to Literacy Practices in Japanese Children: Functions of Literacy after Acquisition.

研究代表者

松本 博雄 (MATSUMOTO, Hiroo)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：20352883

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)： 幼児期と学童期初期における文字使用実態の質的な相違を検討することを目的に、リテラシー獲得開始期の子どもを対象に、絵本の作成とそれに基づく語り課題、および子どものリテラシー獲得水準と文字環境に関する保護者への質問紙調査を設定して実証データを収集した。その結果、幼児期後半においては学童期とは異なり、従来型のテストで測定される読み書き指標が、日常場面の文字使用実態に必ずしも反映されないこと、またより早期の文字に対する関心や、読み書きできる文字数の多さが、実際の文字表現やそれを経ての文字機能の自覚へとただちに結びつくわけではないことが示された。

研究成果の概要(英文)： This study examined how letter knowledge and the home literacy environment are linked to the literacy practices of Japanese children. Fifty-four kindergarten-aged children (range: 54-83 months) were asked to create short books and describe them to an examiner, to measure their literacy skills. The children's letter knowledge and the literacy environments at home were assessed via a parental questionnaire. The results showed that 83.9% children used letters (sentences, phrases, or words) in their books, and 41.9% children could describe their book without the examiner's help. Although these children knew 50 letters or more, they did not become interested in or begin to write letters earlier than the other children. The results suggest that creating an environment that allows children to gain letter knowledge facilitates the literacy skills of Japanese children.

研究分野：発達心理学・教育心理学

キーワード：文字 幼児 リテラシー 保育 絵本

1. 研究開始当初の背景

日本語を母語とする子どもの多くにとって、ひらがな文字の獲得は小学校で扱われる「基礎学力」のための教授を経て達成されるというより、実際には幼児期に開始され、進行するプロセスである。このことは、近年実施された幼児期のリテラシー獲得に関する大規模調査(たとえば内田・浜野・後藤, 2009)において、ひらがな文字の読み書きにおける5歳児の平均得点が極めて高く、男女ともに満点に近いことから裏付けられよう。

この幼児期における課題である文字獲得プロセスに関して、「幼児は文字をどのように獲得するのか」という問いに基づき、文字獲得を従属変数として、読み書きがいかに成り立つかの説明を試みる先行研究が多く見られる。たとえば天野(1986)は音韻意識(phonological awareness)に着目して文字獲得プロセスを明らかにした研究として、また無藤・遠藤・坂田・武重(1992)は、子どもにとって身近な「名前の読み」の獲得を手がかりに文字獲得プロセスに迫った研究として位置づけることができよう。このような研究動向は日本語に限ったことではなく、初期読み書き能力の獲得をいかに説明するかは、国際的にも注目されているトピックである(たとえば Shatschneider, Fletcher, Francis, Carlson, & Foorman, 2004)。

これに対し就学前の教育実践という観点からは、幼児期における文字獲得にもう一つの課題があると考えられる。それは「幼児期に文字を獲得することは、その子どもにとってどのような意味をもつのか」という、文字獲得が幼児に何をもたらし、当該児の生活をどのように変化させるのか、またそれは後の学童期へといかに結びつくのかという問題である。このような立場から、就学前の教育実践において、子どもにとって何が「価値ある問い」であるかを考えると、文字獲得プロセスに関する従来の先行研究の成果を介して導かれる、子どもが文字を読み書きできるようになるための必要条件の検討という視点に加え、そのように文字が獲得されること自体が、就学前の子どもたちにもたらす意味について考察することが必要になる。

2. 研究の目的

本研究ではこのような問題背景をふまえ、リテラシー獲得期である幼児期後半から学童期にかけて、子ども自身が文字を使いたくなる機会にいかに関与させられ、実際にそれを使っていくかという観点から、文字機能に対する自覚および日常生活における使用実態に着目し、幼児期と学童期初期におけるその質的な相違を検討することを試みた。

具体的には、個別検査場面で文字が読める幼児の日常生活における文字の使用実態や

その機能に関する意識は、学童期におけるそれとどのような質の違いを有しているかについての実証データを収集した。その成果をふまえ、幼児教育・保育課程を編成し実践を展開するにあたり、リテラシー獲得に関わる言語活動をどのように位置づけられるか、実践レベルでの留意事項および保障すべき条件を展望することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 実証データに基づく研究

保育所・幼稚園4～5歳児のべ54名(54-83ヶ月)を対象に、幼児の日常に埋め込まれた活動である「絵本作り」に着目し、創作絵本の作成とそれに基づく語り課題、および子どものリテラシー獲得水準と文字環境に関する保護者への質問紙調査を設定した。その結果に基づき、文字獲得期である幼児は絵本を作成するにあたって文字をどの程度用いるのか、作成した絵本について語る際に、文字はいかに機能するのか、また実際に用いられた文字は、当該の子ども文字獲得水準に関する大人の見立てをどの程度反映したものを検討した(雑誌論文 / 学会発表)。

またリテラシー獲得の前提条件である、幼児期の音韻意識の発達に関するデータを整理し報告した(学会発表)。

(2) 保育・教育実践記録の分析に基づく研究

リテラシー獲得期である幼児期後半から学童期前半に焦点をあて、保育実践記録並びに保育所・幼稚園と小学校の交流実践の記録を収集し、「学び」という視点から諸実践の価値づけと整理を試みた。それに基づき、保育・教育実践の中でリテラシー獲得をどのように保障しうるか、その背景となる条件と留意事項を考察した(雑誌論文 ~ / 学会発表 / 図書)。

4. 研究成果

(1) 実証データに基づく研究

絵本作成課題を通じて示されたのは、文字獲得の初期である幼児期後半において、個々の文字を書き表現することと、それを媒体として使えることの間には一定の時間の隔たりが存在するということであった。このことは、幼児期における文字獲得のプロセスはその手段的価値を自覚されることなく開始され、ある程度文字を使う経験が蓄積された後にその道具としての価値が認識される、という内田(1989)の指摘を裏付けるものである。実際にこの時期には、何らかの情報を伝える道具としての文字使用ではなく、文字を書けることの嬉しさそのものを味わいつつ、紙にひたすら文字様のものを羅列する姿を日常的に目にすることがよくある。このよう

に文字を用いての表現自体を目的として展開する活動の存在は、幼児期ならではの姿として理解できよう。少し前に作成した絵本を頭の中にとどめておく記憶、そしてそれを相手に伝える情報伝達の手段としての文字の使用は、このような目的としての文字表現の積み重ねを土台に、そのような活動が他者とのやりとりに支えられながら展開することを介して徐々に可能になっていくものと思われる。

また、絵本作成課題と保護者へのアンケートの結果から明らかになったのは、幼児期における文字使用の獲得は、文字への関心や書きそのものの開始時期、家庭における文字指導のスタイルなど、一般によく着目されるリテラシー獲得の諸側面を必ずしも直接的に反映したものではないということである。たとえば文字により早い時期から親しむこと、より早い時期に書けるようになること、また媒体を使うなど特定の方法で文字指導へアプローチすることは、必ずしも幼児期における道具としての文字使用を促進するわけではなかった。

これらの結果から、幼児にとっての文字獲得とは、単に一人の子どもが一つ一つの文字を正確に覚えるという活動としてではなく、正確に読み書きできる前段階も含めた“文字”の機能を、他者とのやりとりに埋め込まれたかたちで実感していく活動として構成されていることが示唆される。このことは初期リテラシー(Emergent literacy)の獲得を支えるにあたって、それがどのような環境のもとで成り立っているかに着目している、近年の諸研究の方向性とも重なる(Cf; Bower, 2014)。

従来、わが国の幼児における文字獲得に関わる議論は、文字を直接的・体系的に指導する必要があるか否かという文脈で論じられることが多かった。本研究の結果からは、どの水準でのリテラシー獲得が必要かと同時に、それによって子どもにもたらされるものは何であるか、また就学前の子どもに対し文字をどのような環境で獲得できるよう支えるかという観点から文字獲得を捉える必要性が示されたといえる。

(2) 保育・教育実践記録の分析に基づく研究

先述したように、一般にリテラシーの獲得は、「子どもはどの程度文字の読み書きができるのか」という個別式のテストによって明示される結果に基づき評価されることが多い。このような形式は、初等教育以降の教科教育実践において一般的である、当該の単元における“めあて”の明示、教科書の存在に代表される“系統的教授”、“テスト”による評価というセットのうえで展開される学びと強く結びつきやすいスタイルだといえよう。いっぽうで幼稚園教育要領や保育所保育指針に基づけば、保育実践を通じて成り立つ学びは、「遊びを通じての総合的指導」を介

して成立するものであり、あらかじめ明示された水準の知識の獲得にとどまらず、子どもが周囲の世界についての自分の理解の仕方に気づき、考え、新たに発見することの経験を基礎に、学習意欲や好奇心、自らの学習に対する自信を発達させていくというプロセスに関わるものだと考えられる。

本研究の成果をふまえ、幼児期におけるリテラシーの獲得について、「幼児はどのように文字を使いたくなるのか」という、文字獲得の量や時期という指標以外の観点から評価を試みる立場にたったとき、就学前教育である保育実践の現状と整合させつつそれをいかに保障できるか、また保育所・幼稚園と小学校の交流実践や接続カリキュラムに代表される就学前から就学初期の教育プロセスにおいて、そのような経験を保障する場面を具体的に準備することがいかにして可能になるかという、次の課題を導くことができよう。

【引用文献】

- 天野清 (1986). 子どものかな文字の習得過程 秋山書店
- Bower, V.(ed.) (2014). Developing early literacy 0 to 8: from theory to practice. SAGE Publications Ltd.
- 無藤隆・遠藤めぐみ・坂田理恵・武重仁子 (1992). 幼稚園児のかな文字の読みと自分の名前の読みとの関連 発達心理学研究, 3(1), 33-42.
- Shatschneider, C., Fletcher, J., Francis, D., Carlson, C., & Foorman, B. (2004). Kindergarten prediction of reading skills: A longitudinal comparative analysis. *Journal of Educational Psychology*, 96(2), 265-282.
- 内田伸子 (1989). 物語ることから文字作文へ: 読み書き能力の発達と文字作文の成立過程 *読書科学*, 33(1), 10-24.
- 内田伸子・浜野隆・後藤憲子 (2009). 幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響: 日韓中越豪国際比較調査 お茶の水女子大学・ベネッセ共同研究 2008 年日本調査報告 お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」拠点国際格差班プロジェクト報告書

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

松本博雄・伊藤崇・常田美穂・三原菜月 2014 幼児期における文字表現と文字使用 絵本作り活動における文字の機能から *心理科学*, 35(2), 53-63. (査読有)

松本博雄 2014 五歳児も小学生もわくわくする保幼小接続を目指して 現代と保育(ひとなる書房), 88, 94-116. (査読無)

松本博雄 2013 「仲間とともに考える」五歳児保育をどうつくるか 現代と保育(ひとなる書房), 87, 118-135. (査読無)

松本博雄・松井剛太 2013 保育における子どもの「学び」を記述するために「第一の学び」と「第二の学び」に着目して 香川大学教育学部研究報告第1部, 139, 71-78. (査読無)

松本博雄 2012 実践に「役立つ」心理学の専門性とは? 「答え」を超え「良質の問い」の創造へ 心理科学, 33(2), 1-6. (査読有)

松本博雄 2012 保育を通じて子ども達は何を「学ぶ」か 現代と保育(ひとなる書房), 83, 122-138. (査読無)

〔学会発表〕(計 5 件)

Matsumoto, H. & Tsuneda, M. (2014). From letter knowledge to literacy practices: Acquisition of literacy in Japanese children. United Kingdom Literacy Association 50th International Conference. (University of Sussex, Brighton, UK. July 5, 2014.)

松本博雄・伊藤崇 2013 幼児期における文字の利用 幼児の絵本作り活動における文字の機能と文字獲得水準 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, 498. (法政大学: 東京都千代田区, 2013.8.19.)

松本博雄 2013 「小学校に入ったら困らないようにする」保育か、「小学校では味わいにくい経験を保障する」保育か 日本教育心理学会第 55 回総会自主企画シンポジウム『改めて保幼小接続を考える 滑らかな接続の意味するところ』話題提供 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, 82-83. (法政大学: 東京都千代田区, 2013.8.17.)

Matsumoto, H. (2013). Phonemic Awareness and Learning to Read in Japanese Preschool Children. American Psychological Association 121st Annual Convention. (Honolulu, Hawai'i, USA. Hawaii Convention Center, July 31, 2013.)

松本博雄・伊藤崇 2013 幼児期における文字の利用 幼児の絵本作り活動における文字の意味 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, 593. (明治学院大学白金キャンパス: 東京都港区, 2013.3.17.)

〔図書〕(計 2 件)

松本博雄 2015 子どもの認知とことばの発達 小平英志・田倉さやか編 保育のための心理学ワークブック 第 2 章 ナカニシヤ出版 Pp.15-28.

松本博雄・常田美穂・川田学・赤木和重 2012 0 1 2 3 発達と保育: 年齢から読み解く子どもの世界 ミネルヴァ書房 全 224 頁

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/kagawachild/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 博雄 (MATSUMOTO, Hiroo)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号: 20352883

(2) 研究協力者

伊藤 崇 (ITO, Takashi)

北海道大学・教育学研究院・准教授

常田 美穂 (TSUNEDA, Miho)

香川短期大学・専任講師

松井 剛太 (MATSUI, Gota)

香川大学・教育学部・准教授

三原 菜月 (MIHARA, Natsuki)

島根県雲南市立三刀屋幼稚園・教諭